

考古資料調査報告より



《廣形銅鉞》 弥生時代後期（1-3世紀） M291



《土製經筒》 M993

木村定三コレクション日本考古目録

凡例

- ・本目録は、愛知県美術館に寄贈された木村定三コレクションのうち、日本考古の資料を掲載し、解説を付したものである。
- ・各資料名は調査者の見解を勘案して決定した。
- ・各資料のデータは、掲載番号、資料名称、年代、寸法（cm）、産地、コレクション番号、受入時名称の順に記した。
- ・作品解説は、吉田広（愛媛大学ミュージアム教授）、原田幹（あいち朝日遺跡ミュージアム館長兼学芸課長）、原田昌浩（南山大学講師）大西遼（愛知県陶磁美術館学芸員）が執筆し、解説末尾に姓（名）を記した。
- ・本目録の作成に際しては、奈良県立橿原考古学研究所の水野敏典氏、鳥根県立八雲立つ風土記の丘の齊藤大輔氏、下松市教育委員会の林弘幸氏に資料の類例に関するご教示をいただいた。記して謝意を表す。

1. 細形銅劍

弥生時代

3.7×31.7

M290 (細形銅劍)

大きな欠失部も含め全体に端部欠損が及び、砂泥付着や斑状の錆があり、器表面の状況は良くない。現存長31.7cmうち刃部長29.2cm、現状身幅最大3.7cmを測る。刃部と脊上を同時に研ぎ出し、刃部中位やや下方に、刃端部は突起・脊上は節帯を介して、外形が内湾に転じた刳方部をもち、さらに段差を残しつつ下端関部まで刃部と脊上の研ぎ出しが達している。他方、刃部研磨の及ばない翼表面には鑄放しに近い痕跡が見える。以上の特徴から、本銅劍は細形Ⅱ式b類銅劍にあたる。同型式は朝鮮半島から弥生時代中期の日本列島西半の広域で出土するが、中四国地方以東出土なら関部双孔を伴うことが通例であり、関部双孔をもたない本例が、「石之神々社出土」との箱書が語る奈良県石上神宮出土である可能性は低い。古物価値称揚のため、由緒ある神社名が後付けされたと考えられる。(吉田)



2. 広形銅矛

弥生時代後期 (1-3世紀)

全長85.1 関幅13.0 鋒幅12.7

M291 (広形銅鋒)

片側端部に欠損が少しあるものの全形がよく残る。現状で全長85.1cm・鋒最大幅12.7cm・刃部最小幅9.2cm・関部幅13.0cmを測り、鋒部での刃幅増が著しい。刃部は横断面凹状の樋を形成し、鑄出し鑄は下端で直線的に屈曲して関部に達する。鋒部中央には研磨による稜線がなく突線が鑄出され、刃部脊上に鑄出し鑄は見られない。袋部下端は大きく裾広がりとなり、片側に扁平板状の耳が付き、1面は二重・もう1面は三重のC字状突線を鑄出す。袋部内側は下端から5cm前後より上に中子が残りに着柄の用をなさない。以上の特徴から、本銅矛は北部九州で弥生時代後期に製作された広形Ⅱ式銅矛にあたる。収納箱内に「銅鋒／筑前國筑紫郡春日村」と墨書された紙片があり、福岡県春日市内では広形銅矛の製作が行われていたものの、確実な製品出土は現在所在不明の須玖岡本ノ辻の9本のみ。表裏で器表面の状況が異なる本品が、その複数埋納例の1本である可能性がある。(吉田)



3. 中広形銅矛

弥生時代

全長80.0 関幅8.1 鋒幅6.5

M292 (銅銚)

袋部から関部への転換部で接合復元され、刃部は本来の外形をほぼ残しつつも、全域で端部を細かく欠損する。現存長80.0cm、本来は全長80.3cmに復元される。現状で鋒最大幅6.5cm・刃部最小幅5.5cm・関部幅8.1cmを測り、刃部は中位で若干細く鋒でやや膨らむ程度。また、刃部は横断匙面状の樋を下端関部まで形成する。袋部下端片側には外周を突線状に内側を研削した断面菱形の耳が付き、中央薄身部に径0.1cm程度の孔が鑄造後に開けられている。袋部は、この孔の位置にあたる下端から3.2cm前後で削り出しによる微かな段差を設けて節帯とし、下端で幅5.0cm・厚さ3.7cmを測る。袋部内側は下端から10cmより上に中子が残り、着柄の用をなさない。以上の特徴から、本銅矛は北部九州で弥生時代中期末葉に製作された中広形銅矛にあたる。出土に関する情報を一切伴わないが、型式および欠損状況から、西日本のいずれかの地域出土の埋納例と推測される。(吉田)



4. 磨製石斧

縄文時代

長10.5×幅5.7×厚2.9cm 重285.4g

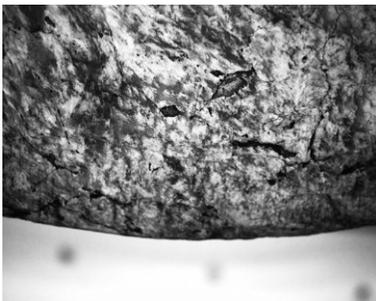
M1040 (磨製石斧)

両刃の磨製石斧。石材は蛇紋岩製か。刃部長は5.6cmで、刃縁は外湾し丸味をもつ。基部は刃部より小さく窄まる。両側縁は平坦な面で、主面と側面の境界となる稜が明瞭に作り出されている。全体に丁寧に研磨されており、基部の一部を除き、整形段階の剥離痕や敲打痕は認められない。地域、時期は不詳であるが、縄文時代の所産であろう。

磨製石斧は、主に木材の伐採や加工に用いられた工具である。本資料は、刃縁に使用痕とみられる摩滅（潰れ）、鈍い線状痕が観察され、実際に木作業に用いられた傍証となる。(原田幹)



石斧写真



刃部の摩滅と斜行する線状痕



3D画像

5. 勾玉

古墳時代前期～中期

長1.9×幅1.3×厚0.8cm 重3.1g

M1111 (勾玉)

木製の小箱に収められており、箱蓋裏右上に「福岡県浮羽郡姫治村字新川発掘」と記載した紙を貼付し、左下には方印が押印されている。浮羽郡姫治村字新川は現うきは市浮羽町新川か。

ヒスイ製の勾玉。背部の湾曲が強く、腹部も短く湾曲している。頭部には、孔を中心に放射状にのびる溝が3条刻まれている。いわゆる丁子頭勾玉（ルビ：ちょうじがしらまがたま）と呼ばれるものである。ヒスイ製の丁子頭勾玉は、弥生時代中期から後期にかけて北部九州で盛行し、古墳時代には近畿地方で急増し分布も関東地方、東北地方まで広がり、その下限は奈良時代とされる。本例は形態の特徴から古墳時代前期から中期の可能性が高い。（原田幹）

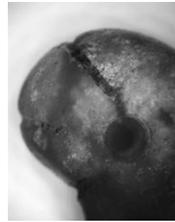
参考文献

木下尚子 2011「4 装身具」『講座日本の考古学6 弥生時代（下）』同成社 296-315頁

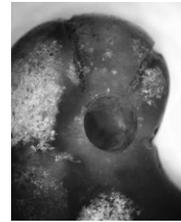
潮音大 2019「丁子頭勾玉の展開過程と地域性」『原始・古代日本における勾玉の研究』雄山閣 107-132頁



勾玉写真



頭部拡大



穿孔部拡大

6. 埴輪（女子）

17.5×13.0×15.5

M305 (埴輪少女)

人物埴輪の女子像・頭部である。頭部は「古墳島田」と呼ばれる女子人物埴輪に特有の髪型を表現するが、前後の端及び髪結の紐は欠損している。両耳は粘土を輪状に貼り付けて立体的に表現し、耳腔部分は穿孔して表現する。その下には耳環2個を耳の表現と同じく粘度を輪状に貼り付けているが、両耳とも1つは欠損しており、貼り付けられた痕跡のみが残る。両目及び口は刀子などの鋭利な工具で穿孔して表現する。鼻は粘度を貼り付けて立体的に表現するが、鼻腔は表現していない。首輪は粘土粒を15個数珠上に配置して表現する。以下は欠損しているが、衣服表現の段差や線刻は見られない。内面には製作時の痕跡がみられ、粘土紐を積み上げたのち、頭頂部分で円盤状粘土を充足する事で頭部を作り出している。（原田昌浩）



7. 埴輪 (男子)

6世紀

35.0×21.9×14.0

M306 (埴輪 (男子))

人物埴輪の男子像である。腰より上部のみが残っており、脚部の表現の有無は分からない。両腕は手甲を外側にし、腰に当てており、左腕が右腕より若干上部にある。指は拇指のみ別づくりで、示指から小指は一枚の粘土に鋭利な工具で切り込みを入れることで表現している。上半身に衣服の表現はない。頭側部に上げ美豆良を表現する。頭頂及び後頭部に頭髪表現はない。耳腔表現はないが、耳環が両側頭部の美豆良下に表現されている。両目及び口は刀子などの鋭利な工具で選考して表現しており、両目は目尻が下がり、口角が上がっている。頸部には首玉表現があり、合計14個の粘土粒を貼り付けていたようであるが、2個は欠損している。

内面には製作時の痕跡がみられ、幅約3.5cmの粘土紐を積み上げたのち、頭頂部分で円盤状粘土を充足する。両腕は胴体とは別につくり、胴体にあけた孔に腕を挿入している。(原田昌浩)



8. 土馬

12.2×10.9×6.8

M1034 (埴輪馬)

土師質の土馬である。顔の側面が三日月形を呈する大和型といわれるものである。目は竹管状工具で刻印されている。たてがみの表現はない。頸部側面の頭部と接する箇所には2箇所、三角形の粘土が貼り付けられており手綱を表現した可能性があるが、他の馬装表現はない。尾はややね上がっている。平安時代の資料か。(原田昌浩)



9. 銅鈴

12.6×8.8×7.5

M2240 (大鈴)

八角稜銅鈴である。上下から見ると外径が八角形を呈するように稜が設けられているが、稜の角度は一定でなくやや歪む面もある。頂部には垂下するための直方体の鈕がつき、中心に円形の孔がある。鈕座に花卉形の装飾がある。本体の上部中程に隅丸方形で一辺5～7mmの孔が4箇所あり、鑄造時の型持たせと考えられる。中央には幅2～3mmの突帯が2条横方向に一周する。下部には幅9mm程の1条の切れ目があり、鈴口とし、鈕と平行する。鈴口に沿って幅広い口唇状の突帯をめぐらせる。内部には丸として小石を1個入れている。(原田昌浩)



10. 鏃

年代は以下作品解説を参照

- ①：7.5×2.8×0.8 ②：6.2×2.1×0.5 ③：7.0×2.6×0.5 ④：4.7×1.6×0.5 ⑤：4.9×1.5×1.0
⑥：7.7×1.6×1.1 ⑦：6.5×2.0×0.5 ⑧：6.2×1.9×0.3 ⑨：5.8×1.7×0.4 ⑩：4.5×1.2×0.4
⑪：4.0×1.1×0.4 ⑫：3.1×1.8×0.3 ⑬：4.0×1.8×0.5 ⑭：5.2×1.2×0.4 ⑮：5.3×2.0×0.4
⑯：4.9×2.4×0.8 ⑰：5.5×1.9×0.3 ⑱：5.2×1.7×0.3 ⑲：5.5×1.7×0.7 ⑳：6.0×1.8×0.3
㉑：6.7×1.8×0.6 ㉒：4.8×1.2×0.6 ㉓：4.8×1.0×1.0 ㉔：5.0×1.6×0.4 ㉕：4.5×1.5×0.3
㉖：3.4×2.7×0.3 ㉗：8.2×1.8×0.3 ㉘：9.2×1.1×0.3 ㉙：9.2×1.3×0.4 ㉚：7.5×3.3×0.8
㉛：7.5×2.1×0.5 ㉜：8.8×1.9×0.4 ㉝：4.8×3.2×0.2 ㉞：4.8×2.8×0.1

M1117 (鏃)

(本作品は34点一式が4段一箱に収納されており、日本の鏃以外に海外の鏃も含まれる。)

図版の各作品番号(以下同様) 1、2、7、8、9、17、18は柳葉系銅鏃、年代は古墳時代前期。

3は短鋒定角式銅鏃である。両面に同心円状の刻みがあり、中央は凹む。古墳時代前期。

4、12、13、15、16は石鏃。

5は篋被柳葉式銅鏃か。古墳時代前期。

10、11、22は方頭系銅鏃、古墳時代前期。

14は骨鏃。

19は篋被腸抉式銅鏃か。古墳時代前期。

23は鑿頭系銅鏃、古墳時代前期。

1～3、5、7～11、17～19、22、23の銅鏃は古墳時代前期に製作されたものである可能性が高いが、複数の古墳よりの出土品を寄せ集めたものとみられ、一括性に乏しい。

27は腸抉長頸鉄鏃と考えられるが、関部などは欠損している。古墳時代中期以降か。

28は角関の短頸鉄鏃と考えられる。古墳時代中期以降か。

29は鉄製刀子。刀身に鞘の木質が、茎部に柄の木質が遺存している。

30は圭頭式鉄鏃。茎の下部は欠損している。茎部には矢柄との口巻きの樹皮が遺存する。古墳時代中期以降か。

31は柳葉式鉄鏃。古墳時代前期か。

32は長頸鉄鏃。茎部には矢柄との口巻きの樹皮が遺存する。古墳時代中期以降か。

33、34は無茎二重腸抉式鉄鏃。中心には根挟みの痕跡が遺存する。古墳時代中期以降か。

27～34の鉄鏃は銅鏃同様に一括性に乏しく、複数の古墳よりの出土品の寄せ集めかと思われる。

6、20、21、24～26は海外の銅鏃とみられる。

(原田昌浩)

①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑩



11



12



13



14



15



16



17



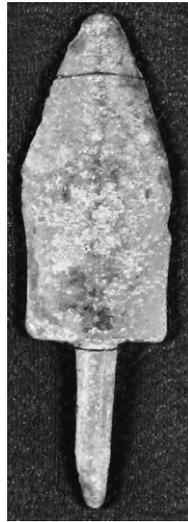
18



19



20



21



22



23



24



25



26



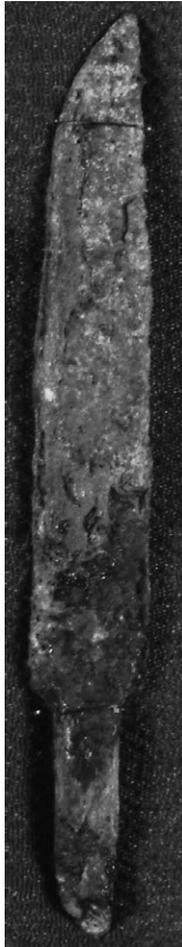
27



28



29



30



31



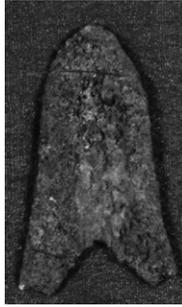
32



33



34



11. 土製経筒

総高13.2 (蓋) 高2.3 口径6.7 (身) 高11.3 口径6.0 底径6.0

側面陰刻銘「妙法蓮華経／文永九年壬申／二月日」

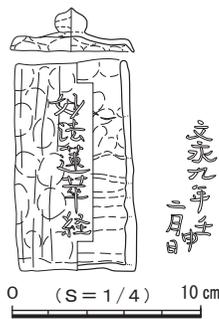
M993 (土製経筒)

本作は経筒形の土製品である。蓋は手づくね、身は粘土紐輪積み成形で、表面に指頭痕が残る。雲母をわずかに含む密な胎土を有し、茶黄色を呈する。所々黒灰色の黒斑がある。身は円筒形で、外面に縦方向の板ナデが施される。蓋は平たい被蓋で、大ぶりの宝珠形の鈕を有する。

大きさや材質が異なるが、本作の形態は平安～鎌倉時代の銅製経筒にも類似例がある。しかし、最も近い形態は室町～江戸時代初期に多く作られた「六十六部廻国」の経筒に見られる。これらは銅製ないし鍍金を施したもので、高さ12cm前後が平均的であり、総高13.2cmの本作に近い。「六十六部廻国」の経筒には、「奉納大乘妙法典」「奉納妙法蓮華経」のような刻銘が一般的に見られるが、本作にも「妙法蓮華経」の刻書(焼成前)がある。

本作の身の胴部側面には「文永九年壬申／二月日」の刻書(焼成前)もあり、これによると鎌倉時代(1272年)となる。干支(壬申)が斜め書きされているが、通常干支の斜め書きは室町時代以降に見られ、鎌倉時代の干支は縦並び、横並び、年号の左右に振り分け等がある。この点、本作の刻銘は異例であり、疑問符が払拭し得ないが、研究者諸氏の批評を求め、あえてこの場で基礎情報を提示したい。

解説の執筆にあたり、吉澤 悟氏(奈良国立博物館学芸部長)から御教示をいただいた。(大西)



12. 須恵器 壺

平安時代前期 (9世紀第3四半期)

高9.9 口径4.2 胴径5.8 底径3.9

篠窯

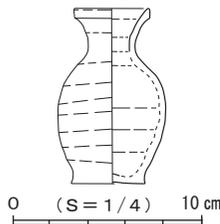
風呂敷「壺 天智天皇宮跡出土」

M2928 (須恵器壺)

本作は慣例的に「壺」と呼ばれることが多いが、口頸部が細く、本来的には液体物を入れる「瓶」と称すべきだろう。密な胎土を利用し、全体にロクロ成形され、底部には轆轤から切り離す際の回転糸切痕が残る。底部は平底である。胴部は卵形で、頸部は外傾し、口縁部は外側を面取りして縁带状となる。焼成は良好で暗灰色を呈する。

本作と類似する小形の壺が、京都府亀岡市の篠窯に所在する石原畑1・2号窯跡、西前山1号窯跡等から出土している。篠窯は平安京から直線距離で約10kmの位置にあり、100基以上の窯跡が知られ、平安時代には須恵器・緑釉陶器の大規模産地に成長し、製品は平安京を始め全国各地に流通した。本作は篠窯産と推定され、篠窯の編年だと9世紀第3四半期に比定される。

本作のような形状の須恵器の壺は、京都府京都市北野廃寺、奈良県奈良市薬師寺西僧房跡、滋賀県大津市崇福寺跡、栃木県日光市男体山頂遺跡等、仏教関連の遺跡で出土が目立つ。(大西)



愛知県美術館研究紀要 第31号 木村定三コレクション編

2025年3月発行

編集・発行 愛知芸術文化センター 愛知県美術館

〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2

Tel: 052-971-5511 (代)

<https://www-art.aac.pref.aichi.jp/>

The logo for AOMOA (Aichi Prefectural Museum of Art) features the lowercase letters 'aomoa' in a stylized, rounded font. Below the letters, the full name 'aichi prefectural museum of art' is written in a smaller, sans-serif font.

制作 共生印刷株式会社

Bulletin of the Aichi Prefectural Museum of Art No.31

Part2 Studies of The Kimura Teizo collection

2025

Edited and Published : Aichi Prefectural Museum of Art

1-13-2 Higashisakura, Higashi-ku, Nagoya 461-8525 Japan

Tel: +81-52-971-5511

Printed : Kyosei Printing Co., Ltd.